ISSN 0916-1368

Contents

・【巻頭エッセー】調べものは楽し … 雲井雅人　●表紙

・Library Data 2018　●2～5

・風景の中で① … 図書館長　井上郷子 ／
資料の部屋① … 柄田明美 ●6

・【私のおすすめ】… 髙根しおん　黒沼佳那　●7

・Information　●8

Parlando

ぱるらんど「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No.303

【巻頭エッセー】 調べ物は楽し

雲井 雅人

フランスの作曲家イベールに、サクソフォーンとピアノのための《アリア》という美しい小品がある。この曲のことを調べていたら、サックス版のほかに、ヴィオラ、チェロ、クラリネット、フルートなどさまざまな版のあることが分かった。そしていちばん気になったのは「ヴォカリーズ（エティッシュのコレクション）」という1行だ。エティッシュとはいったい誰？そして何ゆえヴォカリーズ？

これが僕の調べ物好きの心を刺激した。そして国立音楽大学図書館のWebOPACで検索。ありました！

20世紀初めごろ出版された、エティッシュ編纂「ヴォカリーズ・エチュード　現代のレパートリー」という曲集が4冊収蔵されていた。その目次には、フォーレ、デュカス、ラヴェル、カントルーブ、オーリック、ピエルネ、アーン、ケクラン、オネゲルなどなど、キラ星のごとき作曲家の作品が70曲ほども。「これは宝庫か！」と感じた。この曲集の中に、イベールの《アリア》は《エチュード no.123 》の題名で存在していた。

インターネットでさらに調べていくと、この曲集のことを「宝庫」と呼んで大喜びしている人物に遭遇した。それは本学の小泉恵子先生だったのである。先生はこう述べる。「Hettich氏の編集したヴォカリーズ集は、求めていた美しい作品の宝庫でした。静かに眠っていた譜面を音に変換する作業は、誰もまだ開けたことの無い宝石箱をひとつひとつ開けるような、心躍る瞬間の連続でした」。

作曲家にとって「ヴォカリーズ」という手段は、とても魅力的で創作意欲をそそるのか、到底声楽のための作品とは思えないものもある。作曲家同士の競い合う心理があったのかも。これらの曲は、むしろ管楽器で奏されることを待っていたかのように感じられた。

実際にサックスで音を出してみると、僕の心に染み込むように音楽が入ってきた。サックスという楽器は、主に近現代の作品をレパートリーとしているのだが、近代に至る以前の作品がほぼ欠落しているという憾みがある。それを他の楽器のための曲をアレンジしたりして、自らをなだめているという状況なのだ。しかし、この曲集の作品たちは、まるで僕に吹かれるのを待っていたかのようだった（アーチストたるもの、このような思い込みは大切です！）。現在大学院生たちと協力して、この曲集を音に出してみているところだ。ほとんど音源もない忘れ去られた曲を、自分たちだけでふたたび立ち上げていく作業は刺激的である。

それにしても、このように多くの作曲家たちを動かして企画を実行したエティッシュという男は、どのような人物だったのだろうか。ウィキペディアによれば、女性関係でかなり常軌を逸した面もあったらしいのだが、その根拠となる資料が見つからない。その調べ物もまた楽しいだろう。当時のパリの生き生きした音楽状況に、エティッシュとその曲集が導いてくれることを期待しつつ、今日もまた音大の図書館を渉猟しよう。

●くもい まさと　本学教授（サクソフォーン）